

台湾人類学の先駆者 伊能 嘉矩

生い立ち

伊能嘉矩は慶応3年(1867)5月9日、横田村新屋敷(今の遠野市東館町)に代々南部家に仕える学者の家系に生まれました。幼名を容之助、名前を祖父友寿の幼名を継いで嘉矩と名乗りました。

嘉矩が3歳の時に母千代子が病気で亡くなり、翌年に父守雄は医学を学ぶため上京し、嘉矩は曾祖父九十九、祖父友寿、祖母志奈のもとで育てられました。幼い頃から勉学に励み、19歳の時に「日本維新外史」(漢文)、27歳の頃には大日本教育新聞の編集長となり『戦時教育策』や『戦時教育修身訓』などを著しています。

27歳のとき坪井正五郎に師事して人類学を学び、日本ではじめて東北地方のオシラ神信仰を「奥州地方に於いて尊信せらるるオシラ神に就いて」と題して学会誌に発表しました。

台湾へ

明治28年(1895)伊能は学んだ人類学を実践するための新しい場所を求めて、台湾に渡りました。当時の台湾は治安の不安定もさることながら、熱帯性風土病マラリア・コレラ・ペスト、さらにハブやコブラの毒蛇など、いずれも死につながる危険が身近に存在していました。伊能のノートにはマラリアのことが何度も記録されています。

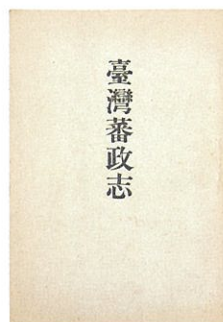
こうした困難な状況の中、伊能は台湾総督府で仕事をしながら様々な種族の言語・習慣・生活様式等の調査に情熱を傾け、明治39年(1906)に帰国するまでの10年間に『台湾蕃政志』をはじめ、多くの論文を執筆しました。台湾各地の現地調査により、先住民族の9つの種族に分類。その成果が認められ、現在でも種族系統研究の基礎となっています。



父守男(右側)とともに(中央が嘉矩)



オシラサマ



『台湾蕃政志』
明治37(1904)刊



パイワン族彫刻絵図



ツォウ族(伊能写真帳より)

アタイヤル族埔里方面
(伊能写真帳より)

